

昔々、マレでひとりの学童が先生の許で学んでいた。マレは生徒たちの村で、多くの生徒たちがあらゆる種類の術を学ぶためにそこに通っていた。彼は木盤を使って出来事を予見する術を学んでいた。それは普通はムワリムから教わる術である。彼が学んでいた期間のある日、先生が授業のひとつの章を抜かして生徒に教えなかった。彼の方でも、教えられた技を実践しようとしたが、盤の上で何度試みても反応がなく、予見の徴はまったく現れなかった。それで彼がわかったのは、教わるべき何かは欠けていたということだった。そこで彼は先生に会いに出かけた。先生は彼に尋ねた：

「お前はここに何をしに来たのだ？」

彼は答えた：

「ただあなたを訪ねに来たのです」。

彼は先生に、修得に欠けているものを密かに仕上げて補うために来たことは言わなかった。彼は先生に何とかして話させようと努めたがうまくいかなかった。生徒はそわそわし始めた。先生の方でも、生徒が自分のところに来たのには別の何かがあることに気づいた。彼は占い盤を使いに出て生徒がいる理由を見つけようと思ったがだめだった。彼は腰をおろして考え始め、それから生徒に話した：

「お前はここに、何か特別なものを探しに来たような気がする。私は占い盤を何度も試したが何も示さず、何も答えなかった。私が見るに、お前は病気ではないし、何もお前に起こるがないことを知っている。だからお前は他のことのために、ちゃんとした訳があってやってきたのだ！」。

生徒は答えなかったので先生は続けた：

「何が何でもお前が来た訳をつきとめるぞ！」。

先生は呪文を唱えて占い盤を叩き始め、丁度生徒に教えなかったところまで来た。その呪文に導かれて彼は気づかないまま全部を唱えてしまった。その時生徒が叫んだ：

「ああ、これからあんたは祈るなら自分の為に祈り、占い盤を使うなら自分の為に使うのだ。だって僕はあんたが教えるのを省いたところを知ったのだから」。

生徒は計略と悪意で先生の警戒の裏をかいて欲しかったものを手に入れた。つまり修得するのに欠けていたものである。まさにこの時に生徒は師を超えたのだった。